

- pflanzen im Kizakisee. Bot. Mag. Tokyo 53: 428-442.
- 角野康郎 (1994) 日本水草図鑑. 文一総合出版. 179p.
- Kunii, H. (1984) Seasonal growth and profile structure development of *Elodea nuttallii* (Planch.) St. John in Pond Ojaga-ike, Japan. Aquat. Bot. 18: 239-247.
- Kunii, H. (1989) Continuous growth and clump maintenance of *Potamogeton crispus* L. in Narutoh River, Japan. Aquat. Bot. 33: 13-26.
- 西条八東 (1957) 湖沼調査法. 古今書院. p. 91-111.
- 鷺谷いづみ・矢原徹一 (1996) 保全生態学入門. 文一総合出版. 270p.
- Wiegleb, G. (1988) Notes on Japanese *Ranunculus* subgenus *Batrachium*. Acta Phytotax. Geobot. 39: 117-132.
- Wiegleb, G. and W. Herr (1985) The occurrence of communities with species of *Ranunculus* subgenus *Batrachium* in central Europe - preliminary remarks. Vegetatio 59: 235-241.

○J. K. Kuo et al. ed. "Seagrass Biology. Proceedings of an International Workshop, Rottnest Island, Western Australia, 25-29 January 1996" (Faculty of Sciences, The University of Western Australia, 385p.)

海草に関する国際ワークショップの記録が1冊の立派な本になった。59題の講演のうち49題は論文として寄稿され、残りの10題は要旨のみの掲載である。現在、海草をめぐるどのような研究の取り組みが行われているのか、最先端の事情を知ることができるというよいだろう。生物地理学的な調査や生理生態学的な研究に加えて、分子系統学の成果を踏まえた海草の進化に関する考察や動物との相互作用の研究、藻場の衰退と復元の現状追跡などが最近の新たな展開と言えようか。

個々の論文についてふれる余裕はないが、入手に困難がともなう Proceedings に寄稿するだけではなく原著論文として雑誌に載せてほしいような重要なものもある。私の個人的興味かもしれないが、分子系統学と繁殖様式の比較から海草の進化を論じた Waycott and Les の "An integrated approach to the evolutionary study of seagrasses" と題した論文など、これからはしばしば引用されることになりそうなアイデアを含んでいる。

本書のもうひとつの面白味は第1章にある。ここでは海草研究の「大家」4人の "Reflections" であるが、"The Sea-grasses of the World" (1970) の著者であり、また現在の水草研究の巨頭のひとりである C. Den Hartog 博士が、どのようにして水草の研究をするようになったかを回顧している。これなど他の場所では知ることができなかった内容で興味をひかれた。

以下に各セクションの題目を抜き出しておく。

1. Reflections, 2. Diversity and Plant Biology,
3. Molecular Genetics, 4. Hydrodynamics, 5. Production and Nutrient Dynamics, 6. Animal Interactions, 7. Decline and Recovery, 8. Monitoring and Management, 9. Abstracts without Manuscripts

○北海道湿原研究グループ (編) 「北海道の湿原の変遷と現状の解析—湿原の保護を進めるために—」 (財団法人自然保護助成基金, 1997年5月, 249p)

北海道の湿原の研究を進めてきた研究者たちが、20世紀末の湿原の現状を記録し、将来の保全の道を探ろうと北海道湿原研究グループを結成して調査を進めてきた。その集大成とも言べき報告書である。北海道には現在約150箇所の湿原が存在している (残っていると言ったほうが正確である。北海道に存在した湿原の7割は既に消滅したという)。第1章では、まずその所在を「北海道の現存湿原リスト」として記録している。第2章「湿原の変遷」では、石狩泥炭地、サロベツ湿原、十勝海岸地域など地域ごとに過去の資料を引用しながら変遷を跡づけている。第3章「各論—湿原の現状と解析—」では、おもに植生を中心に各湿原の現況がまとめられる。第4章「北海道の湿原の現状と湿原保全への提言」では問題点の整理と今後の方策について論じられている。

グループ構成員の大半が植物生態学者であるために植生が中心になっているが、北海道の湿原の現状について全体をまとめたものは今までになかっただけにたいへん参考になる報告書であろう。 (角野康郎)